

# 日韓古代・中世史料の比較

村井章介

## 1. はじめに

韓国に残る一六世紀以前の文献史料という点、『三国史記』『三国遺事』『高麗史』『高麗史節要』『東文選』『朝鮮王朝実録』『新增東国輿地勝覽』『経国大典』『続武定宝鑑』『事大文軌』などがただちに思い浮かぶが、これらはことごとく国家事業として編纂された「官撰」の歴史・文学・地理・法制の書である。一七世紀以降は、旧奎章閣図書（現ソウル大学所蔵）に『承政院日記』『備辺司謄録』を始めとする諸官衙の日記や記録が伝わっているが、これらも同様の性格である。

日本の中世以降の国家体制とは対照的に、韓国では、前近代史を通じて中央集権的な国家機構が健在であり、それを支える官僚システムのなかで史料が産み出されてきた。その結果それらの史料は編纂物の形となり、著しく継続的かつ体系的な性格をもつようになる。たとえば『朝鮮王朝実録』は、王朝の存続した五〇〇年以上の年月をとぎれることなくカバーする、世界にもまれな膨大な記録となった。しかし、歴史学の史料という観点からすると、編纂の過程で加工が加わることによって、史書として完成した形態をとるものほど史料批判が必要な限界性をもつことになる。

もちろん、文人たちの詩文集や李舜臣の『乱中日記』『壬辰状草』など、個人や家にかかわるものもあるが、それらの作品も、官僚組織の中

での地位や活動を反映したものが圧倒的に多い。個人や家も、官僚組織にしかるべき地位を占めることによって（あるいは過去に先祖がそのような地位を占めたという歴史的記憶によって）、社会的地位を保証されてきたのである。

これに対して日本では、古代の律令国家こそ中央集権の官僚制の外被をまとっているけれども、その内実は国家支配が在地社会にそれほど深く食い込んでいたわけではなかった。まして律令体制の弛緩、すなわち中世への移行のなかで、中央集権の官僚制の形骸化はますます甚だしくなり、国家権力が上級貴族・大寺社・幕府などの「権門」に分有されるようになっただけでなく、在地社会自身が国家による権利保証から離れて、独自の法的世界を形成し始める。

こうした社会体制のなかで産み出される史料は、いきおい国家的官僚制のシステムに沿ったものではなく、各「権門」ごとに独自の支配システムを反映して多様なものとなり、さらには在地社会の側に留められて、各個人や家の権利保証に備えられるという形で伝来することになる。その結果、日本の中世史料は、いちじるしく分散的・非系統的な残り方をしている。だがその一方で、日記や古文書などが、記された当時の状態（もちろん写本の場合が多いが）大量に残ることになった。このような一次史料の豊富さは、おそらく世界で一、二を争うほどと思われる。

## 2. 日本古代の朝鮮渡来文物

日本の黎明期の歴史情報は、朝鮮半島との関係に関わって記録されたものが、重要な位置を占めている。文字（漢字）や宗教（仏教）といった文明のあかしが、朝鮮半島から伝えられたことの、当然の結果である。奈良県天理市石上神宮に所蔵される「七支刀」に刻まれた泰和四年（三六九年）の金象嵌の銘文には、敵兵を退ける霊力を持つこの刀を、百済王が作らせて倭王に送る、という意味のことが記されている。この銘文から当時の百済と倭との関係をどう理解するかについて、学説が対立しているが、日本史の謎の時代と言われる四世紀の重要史料であることに違いはない。

埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣に刻まれた辛亥年（四七一年か）の金象嵌銘や、同じころと思われる熊本県菊水町の船山古墳から出土した鉄剣の銀象嵌銘は、五世紀後半の雄略天皇（ワカタケル）の時代の地方豪族と大和国家との関係を物語る重要史料である。和歌山県橋本市隅田八幡神社所蔵の人物画像鏡に刻まれた癸未年（五〇三年とされるが異説が多い）の銘も含め、日本における文字使用のごく初期に位置づけられるもので、朝鮮半島からの渡来人の手になるものとの説が唱えられている<sup>(3)</sup>。

奈良市の東大寺正倉院に納められた佐波理加盤（銅合金製のボウル）に付着していた古文書は、この器物が新羅からの伝来品であることを証すると同時に、八世紀ころの新羅の在地社会を語る史料である。同く正倉院の華嚴経論の帙の内部から、九世紀の新羅の「村落文書」が見つかっている。そのほか正倉院には、「新羅楊家上墨」「新羅武家上墨」という刻銘のある墨を始め、新羅製と推定される琴・毛氈・匙・皿・鉢など、新羅関係の文物が多い。これらの例のように、朝鮮半島では滅びてしまった一次史料が断片的ながらも残されている点が、日本所在の韓国史関係

史料の大きな特徴といつてよい。

## 3. 日本古代文献の朝鮮関係記事

日本最初の正史『日本書紀』の古い時代の部分には、「百済紀」「百済新撰」「百済本紀」からの引用が多数見られるが、これらは『日本書紀』に引用された逸文としてのみ伝わる書である。百済で成立した原年代記を、六六三年に百済が滅亡したとき、百済人が携えて倭国に亡命し、それをもとにして修辭を加え（「日本」「貴国」「天皇」「天朝」の用語など）、『日本書紀』編纂の際に史局に提出したものと考えられている。

『百済紀』は近肖古王代から蓋鹵王代までの百済国の歴史を記したもので、神功・応神・雄略紀に数箇所の引用がある。「百済新撰」は雄略・武烈紀の五箇所に引用があるにすぎない。「百済本紀」は武寧王から徳王の初世にわたるもので、継体・欽明紀の一八箇所に引用があり、というよりこの二世紀は大部分が本書による記事で占められている。一三世紀の『三国史記』『三国遺事』よりも古い記録が朝鮮半島に残されていない状況からいって、『日本書紀』に引用された「百済紀」等は、朝鮮半島の古代史の重要史料でもある。

日本の古代国家が確立する六世紀末以降、日本と新羅、日本と渤海との間でやりとりされた数多くの使者に関わる記録が、双方に残されているが、日本側の記録の方が詳しいことが多い。『六国史』や『類聚三代格』のなかに多くの関係記事があることはいうまでもないが、日本に到来した使節が日本の文人貴族との間でやりとりした漢詩文が、奈良時代の『懷風藻』や平安時代の『本朝文粹』『菅家文章』『田氏家集』『扶桑集』などの文学作品のなかに残っている。

奈良時代の代表的な絵画として知られる鳥毛立女屏風（樹下美人図）の下貼文書には、七五二年に律令官人たちが新羅使から買い付けた舶載

品のリスト（買新羅物解）があるが、これと一連の文書は他の正倉院文書や東京の尊経閣所蔵文書のなかにもある。そこには香料・薬材・顔料・染料・金属工芸品・器物・調度・仏具・黄金・食料品（人参・松子・蜂蜜など）など多種多様な品名があげられている。これらは新羅の産物以外に、唐・南海・ペルシアなどからの中継品も含まれ、当時の新羅が営んでいた広範な貿易の姿が伺われる。

八三八年から八四七年まで唐に渡って各地の名刹を訪れた天台宗の僧円仁は、大部の旅日記『入唐求法巡礼行記』のなかで、山東半島にあった新羅人の村を訪れたことを記している。この記述から、張宝高を始めとする新羅の海上勢力が、唐・新羅・日本を結ぶ航路上で縦横の活躍をしていたことが知られる。

#### 4. 「刀伊の入寇」の関係史料

一〇一九年、女真族の海賊が対馬・壱岐や九州北辺を襲い、人民を連れ去るといふ事件があった（刀伊の入寇）。高麗は海賊船の帰途、朝鮮半島東岸で兵船を発し、被虜人を取り返して日本に送還した。藤原実資の日記『小右記』は、この事件を詳細に記しているが、とくに高麗船に救出された筑前国内蔵石女と対馬国多治比阿古見というふたりの女性の見聞記と、それを京都に伝える太宰府の報告書を、原史料のまま載せている。見聞記には、救助された高麗の軍船について、つぎのような具体的な描写がある。

乗せられた船のなかを見ると、通常の船よりはるかに広大であった。船体は二重になっていて、船上には櫓が左右に四本ずつ設けられている。漕ぎ手の水夫は五、六人で、兵士は二十人あまり乗りこんでいる。櫓は懸かかっていない。もう一艘は櫓が左右七、八本ずつで、船首に鉄の角を取り付けてある。これは賊船を突き破るためのもの

である。船中には色々な武器が設けてある。鎧・甲冑・大小の鉾・熊手などである。兵士が面々これらを手に持つのである。また火薬で石を飛ばせて賊船を打ち破る。またその他の船も長大なことは同様である。

これは、高麗の軍備状況について詳しい情報を欲しがっていた大宰府の当局者が、積極的に聞き出したものと考えられるが、高麗の軍制についてのよい史料になるものである。

実資は、親友であった大宰府長官の藤原隆家が手紙に付けて送ってきた右の見聞記を、日記の裏面に書き留めた。実資が刀伊の一件に関心を寄せていたのは、隆家との昵懇さに加えて、かれがたまたま刀伊との合戦で功績があった武士に対する恩賞を審議する会議の座長となっていたからであった。こうした偶然が重なって、希有な一次史料が伝えられることになったのである。

一方、この事件に関する高麗側の記録は、『高麗史』顕宗世家十年四月丙辰条に

鎮溟船兵都部署張渭男らが海賊船八艘を捕獲し、賊が拉致した日本人の男女二五九人を保護した。供駅令鄭子良を日本に派遣してかれらを送還させた。

とあるのが唯一である。高麗にとっては、これも前後にいくどかあった女真族の海賊事件の一つにすぎず、日本史におけるほどユニークな出来事ではなかったから、短くそつけない記事しか残らなかったのは、やむを得ないことかもしれない。しかし、高麗のように、記録が国家の手になる編纂物として残されていく体制のもとでは、二女性の見聞記のようなナマの材料が、原形のまま伝えられる可能性はまずなかったであろう。

## 5. 倭寇に関わる史料

一三世紀の初発期の倭寇については、一二三三年に高麗の金州を襲ったとあるのを最初として、一二九〇年まで『高麗史』にいくつかの記事がある。高麗は何度か使者を日本に送って倭寇の禁圧を求めた。この件に関する日本側の史料は、藤原定家の日記『明月記』、勘解由小路経光の日記『民経記』、『吾妻鏡』、『百鍊抄』などであるが、『青方文書』に『高麗史』と符合する文字のある古文書があることは興味ぶかい。

一三五〇年から本格化し、高麗の人民に惨害を与えた前期倭寇については、史料のほとんどが『高麗史』『高麗史節要』以下の高麗側のもので、あれだけ大きな国際的影響を持ったことであり、高麗側のもので、日本側の史料にはほとんど出てこない。わずかに一三八一年に室町幕府から九州探題兼大隅国守護今川了俊に宛てた指令書に、「大隅国の悪党らが高麗に渡って狼藉を働いているから、厳密に制止を加えよ」とあるのが目立つ程度である(『禰寝文書』)。

そんななかで、一三六七年から翌年にかけて日本を訪れて倭寇禁圧を要請した高麗使については、比較的多くの史料がある。中原師守の日記『師守記』に、返答するか否かについての白熱した議論を伝える記事があり、『醍醐寺文書』のなかに当時高麗の都開京に置かれていた征東行中書省から日本国に宛てた古文書がある。

前期倭寇のピークは一三七〇年代半ばであるが、『高麗史』のなかでこの頃の倭寇記事は、中国正史の「本紀」に相当する編年の叙述である。「世家」の部分にはなく、巻末の列伝第四六以下にある「辛禰伝」のなかに見出される。実は「世家」は恭愍王二三年(一三七四)から恭讓王元年(一三八九)までの間が飛んでおり、「辛禰伝」は本来その間に入るべき内容なのである。なぜこのような不自然な状態になっているのだろうか。

李成桂は、一三八八年、恭愍王の孫辛昌を廢して、王家の遠い血筋から、恭讓王を意のままになる王として擁立し、ついで一三九二年には恭讓王をも不徳として退け、みずから王位についた。このような行為を叛逆と見なされることを避けるため、彼は辛昌の父辛禰は恭愍王の實子ではなく、王の信任篤かった政僧辛暉の子だとする説を流したのである。真相は不明であるが、李氏朝鮮成立後に編纂された『高麗史』は当然李成桂の主張を正しいとする立場で書かれている。その結果、辛禰王・辛昌王二代の治世を記述する「世家」の記事は、「叛逆伝第六」の「辛禰伝」の後に追いやられることになった。

このようなイデオロギー的操作は、「辛禰伝」の倭寇記事に、史料としては困った属性を与えることになった。「世家」では各記事には原則として日付が書かれているが、「列伝」では月まで止めて日付は書かない方針を採っている。その結果、多いときには月に一〇回以上もある倭寇記事から日付が失われてしまった。

## 6. 一五一―一六世紀日朝の相互観察記録

一四二〇年に日本回礼使として京都を訪れ、室町幕府と外交交渉を行った宋希環には、日本への往來の旅を詳しく記した紀行詩文集『老松堂日本行録』があるが、その良質の古写本(一六世紀なかば以前)が東京都文京区の個人蔵となっている。漢詩を中心として、それに付した長文の序に見聞を盛り込むという、この書物の体裁は、江戸時代のいわゆる朝鮮通信使が残した多数の日本往來記録に引き継がれることになった。朝鮮人の日本・琉球観察記録は、『朝鮮王朝実録』にも豊富に見られる。使者として日本へ赴いたり、漂流して日本や琉球に流れ着いた人から、朝鮮政府は日本・琉球情報をできるだけ詳しく聞き出し、それを正式の記録として残していった。一四七一年に朝鮮の領議政兼礼曹判書

(首相兼外相) 申叔舟が著した『海東諸国紀』は、そうした情報を集大成して、対日本・琉球外交に備えたハンドブックである。<sup>(9)</sup> 申叔舟は、日本との関係については「其の情を探り、其の礼を酌み、而して其の心を収む」という気構えが大切だという。まず情すなわち日本という国の実情を正確に知ることが肝心で、その認識に基づいて礼すなわち外交に熟慮を払えば、相手の心をつかむことができ、安定的な交隣関係が築ける、という論理である。偏見に囚われない客観的な眼で相手を理解しようとする姿勢が印象的である。<sup>(10)</sup>

また、『海東諸国紀』には日本・琉球を描いた何枚かの地図が収められているが、これは博多商人道安が朝鮮に持参した地図をベースにしたものである。つまりあの地図には、琉球・九州・朝鮮を結ぶ海域における日本商人の活動が反映しているわけであるが、皮肉なことにその内容は、朝鮮の日本・琉球情報収集の網にかかることによって始めて、史料として残されることができたのであった。

日本側の朝鮮認識は、一五世紀にあれほどたくさん日本人が朝鮮を訪れたにもかかわらず、ひどく貧弱なものだった。『老松堂日本行録』や『海東諸国紀』に匹敵する朝鮮観察ないし朝鮮研究は残されていない。わずかに中世末の一五三九年、大内義隆の使者としてソウルを訪れた尊海の短い渡海記録が、広島県厳島・大願寺の屏風絵の裏に記されているだけである(『尊海渡海日記』)。その理由は、第一に、中世の日本が外交情報を組織的・系統的に収集整理するシステムを欠いていたこと、第二に、中国とは対等な関係を目指し朝鮮を一段下に見るといふ古代以来の対外認識の枠組みが、朝鮮に対する生き生きとした関心を抱かせなかったこと、に求められる。

一四六六年に成立した『善隣国宝記』は、禅僧瑞溪周鳳が、仏教徒の往来を中心に外交の推移をたどり、室町時代の外交文書を収録し、後

世の外交当事者の参考に資そうとした書である。<sup>(11)</sup> 时期的にも内容的にも『海東諸国紀』と対比できる書物といえよう。ところが本書のおもな関心は中国との関係にあり、朝鮮の扱いは軽い。瑞溪は、天竺(インド)・震旦(中国)・本朝の「三国」を世界の構成要素とする伝統的な仏教的世界観に制約されて、朝鮮諸国を中国の付属物としてしか認識しえなかった。序文の最後の「百済はけだし震旦の域である……この記に多く新羅・高麗の事を載せたのも、これを震旦の一部とみたからだ」という文章がそれをよく示している。

## 7. 文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)を語る従軍者の「覚書」

前近代日韓関係史上最大の事件である豊臣秀吉の朝鮮侵略に関しては、日韓双方に膨大な史料が残されている。ただ、これまでの研究においても利用されてきたのは、日本側では古文書や日記などの一次史料、韓国側では『朝鮮王朝実録』など国家編纂の史書が中心であった。各時点・各地域での戦闘の場所・規模・参加者などについては細部まで説明されているが、それはいわば鳥瞰的な構図の解明にとどまっており、戦争に關与した個々人のレベルにとつて戦争がどんな意味をもつどのような経緯であったか、については、まだ充分明らかにはされていない。

その意味で注目される史料は、戦争に指揮者としてではなく一兵士として参加した人々の残した記録である。『薩藩旧記雑録後編』をひもとくと、兵士たちが朝鮮の前線から日本へ送った手紙が何通か見出される(大嶋忠泰が妻に宛てた手紙など)。リアルタイムに戦争を記録した貴重な史料であるが、戦争のごく一部分を切り取ったもので、数もさほど多くない。これに対して、江戸時代の初期に島津家の史局から求められて藩士たちが差し出した「覚書」の類は、数十年後に記憶をたどって綴つ

た二次史料ではあるが、各人なりに戦争の経験を総括したものであり、またかなりの数が残っている。しかし研究で使われている書目は偏っており、活字化さえ充分ではない状況である。

最後に、現在までの私の調査で判明しているもののリストを掲げて、今後の参考に供したい(別紙参照)。

〔註〕

- (1) 以下の叙述は、村井章介「日本の史料整理事業と韓国関係史料」(韓国国史編纂委員会『国史館論叢』七三輯、一九九七年)によるところが多い。
- (2) 米谷均「東大史料編纂所架蔵『日本関係朝鮮史料』」(『古文书研究』四八号、一九九八年)は、朝鮮文人の詩文集から日韓関係史料を抜き出した史料集の紹介である。
- (3) 斎藤忠『古代朝鮮文化と日本』(東京大学出版会、一九八一年)二三三—四頁。
- (4) 鈴木靖民『古代対外関係史の研究』(吉川弘文館、一九八五年)第二編二・三・四に詳しい考察がある。
- (5) 村井章介「一〇一九年の女真海賊と高麗・日本」(『朝鮮文化研究』三三号、一九九六年)六六—六七頁。
- (6) 池内宏『満鮮史研究中世第一冊』(吉川弘文館、一九三三年)三一八—三三四頁。
- (7) 中村栄孝『日鮮関係史の研究 上』(吉川弘文館、一九六五年)の「六『太平記』に見える高麗人の来朝—武家政権外交接収の発端—」。
- (8) 村井章介校注『老松堂日本行録—朝鮮使節の見た中世日本—』(岩波文庫、一九八七年)。
- (9) 田中健夫訳註『海東諸国紀—朝鮮人の見た中世の日本と琉球—』(岩波文庫、一九九一年)。
- (10) 河字鳳「申叔舟と『海東諸国紀』—朝鮮王朝前期のある「国際人」の

営為—」(大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、一九九七年)。

- (11) 田中健夫編『善隣国宝記・新訂続善隣国宝記(訳註日本史料1)』(集英社、一九九五年)。

(別紙)

文禄・慶長役覚書類(島津藩関係)

A 鹿児島大学附属図書館玉里文庫

- ① 『諸旧記・上』所収

a 淵辺量右衛門朝鮮陣覚書(淵辺元真、万治二、統群書類従本「島津家高麗軍秘録」)

b 奥関助覚書(奥休安、万治三)

c 出水衆中伊東玄宅申出(寛永一五)

d 伊東玄宅由緒書(寛文四)

- ② 『諸旧記・下』所収

a 押川強兵衛家由緒申出(寅年)

b 御支族大嶋家由緒書

c 江田藤右衛門申出

- ③ 『天正年間地頭附他六部合本』所収

a 中馬大蔵允働次第(中馬重方、寛永一四)

b 伊勢貞昌書出(慶安三)

c 江田藤右衛門覚書(丑年)

d 川上久国泗川在陣記

- ④ 『永禄以来覚書他六部合本』所収

a 帖佐彦左衛門覚書(帖佐宗辰、慶長一六)

- ⑤ 『面高連長坊俊言自記他十部合本』所収

a 面高連長坊俊言自記

b 大重平六高麗覚書

c 菱刈休兵衛奉公覚

⑥『髮切由来記他十部合本』所収

- a 長谷場宗純文明記
- b 川上久国雑記

⑦『有馬原城覚書他七部合本』所収

- a 虎狩之記〔奥関助覚書〕の抜粋)

B 東京大学史料編纂所

①写本・謄写本

- a 朝鮮国泗川戰場之大抵〔伊藤玄宅申出〕に同じ 4140.5/31
- b 高麗日記〔奥関助覚書〕に同じ、都城島津家本 2040.5/48
- c 朝鮮軍覚書〔淵辺量右衛門朝鮮陣覚書〕に同じ、都城島津家本 2040.5/53
- d 帖佐彦左衛門書上〔帖佐彦左衛門覚書〕に同じ、都城島津家本 2040.5/71

- e 樺山忠助入道紹劍自記(鹿児島県立図書館本、慶長一〇『鹿児島県史料集』三五) 2044/43

- f 長谷場越前自記(長谷場宗純、島津忠重本、慶長八) 2044/49

- g 新納忠元勲功并家筋大概(新納嘉次郎本) 2075/130

②『群書合輯』第六冊所収 島津家本やI-12-33-323-(6)

- a 玄宅由緒書并高麗入覚書〔伊東玄宅由緒書〕に同じ)
- b 大山稻助覚書(寛永五)

③『旧典類聚』所収 写本 4140.1/34 およびその転写本 2040.1/27

- 大重平六覚書(第一冊)／中馬大蔵覚書(第一冊)／押川強兵衛一世覚(第一冊)／川上久国雑話(第三冊)／朝鮮入乱之記(第三冊)／忠平公軍記(第五冊)／奥関助覚書(第五冊)／翰遊集(第六冊)／旧伝集・坤(第八冊、川上久国雑話)の一部)／朝鮮国唐島戦死人数記(第一冊)／伊地知大膳覚書(第二冊)／高麗渡(第二二冊、大嶋忠泰)
- ④『薩藩旧日記雑録後編』所収〔鹿児島県史料〕旧記雑録後編Ⅱ・Ⅲで活字化)

- a 樺山紹劍自記 II-838, 1016, 1199, 1267, 1486 III-175, 487, 687

- b 長谷場越前自記 II-839, 916, 1200, 1366

- c 朝鮮日々記 II-846, 1017, 1018, 1439 III-173, 245, 269, 270, 272, 273, 274, 354, 405, 406

- d 新納忠増日記 II-1019

- e 大嶋久左衛門忠泰高麗道記 II-1021

- f 新納忠元勲功記 II-1027, 1252, 1442, III-166, 348, 641, 997

- g 新納忠元日記 II-1302

- h 大重平六覚書 III-174, 1406

- i 佐多民部左衛門覚書 III-513～517

- j 伊東志岐入道覚書 III-639

- k 高柳行文覚書 III-581

⑤『西藩烈士干城録』上原尚賢著(島津忠重本、文政二二) 2043/29

C 鹿児島県立図書館

①『古雑史』所収(福島家旧蔵本) 9410043085

- a 大重平六覚書

- b 奥関介入道休安高麗陣覚書(表題誤り、「伊東玄宅申出」に同じ)

- c 奥関介高麗陣覚書之事〔奥関助覚書〕に同じ)

- d 其(玄)宅由緒書并高麗入覚書〔伊東玄宅由緒書〕に同じ)

②『高麗入并虎狩奥関助覚書』(福島家旧蔵本、「奥関助覚書」に同じ) 9410022475

③『高麗軍覚』(福島家旧蔵本、「淵辺量右衛門覚書」に同じ) 9410064152

- ④『朝鮮役及関ヶ原役二於ケル井上主膳覚書外二十六名申出開書自記日記上申状』所収(玉里島津家蔵本から選んで昭和初年に写したもの) 9410043093

- 出水衆中伊東玄宅高麗陣覚書／大重平六高麗覚書／帖佐彦右衛門覚書／菱刈休兵衛朝鮮奉行覚／奥関介入道休安朝鮮陣覚書／江田藤右衛門覚書／谷口宮内左衛門覚書／淵辺量右衛門朝鮮陣覚書

⑤『市来孫兵衛琉球征伐日記外十二名日記等』所収(玉里島津家蔵本から選んで昭和初年に写したものを) 9410043091

大島出羽守忠泰朝鮮渡海日記／大島家由緒書

参考 『西藩烈士干城録』 卷一「干城録引書」より可能性あるものを抜書

諸家由緒記／小番家由緒記／箕輪重洪（澄カ）自記／勝目兵右衛門書／川上  
久辰日記／淵辺良右覚書／伊地知太郎兵衛覚書／伊東玄宅覚書／江田藤右  
衛門覚書／奥休安覚書／押川公近日記／伊勢貞昌覚書／阿蘇玄与覚書／朝  
鮮泗川甲冑記（川上久国著）／中馬大藏記／新納忠増日記／右松祐盛自記  
／川上久国日記／帖佐宗辰覚書／大重平六覚書／伊丹親盛覚書／山口伊賀  
覚書／久国雑話／谷口宮内左覚書／赤塚休意覚書／新納忠元軍旁記／新納  
忠元弓箭記／伊地知重政自記／上野宗秋覚書／家村源左日記／池田貞安記  
／伊集院久信自記／有川貞政記（別云柁城日記）／樺山紹劍自記／原田長  
治覚書